

「サステナビリティに配慮したイベントガイドライン」の紹介

株式会社 電通ライブ

執行役員 石坂 太郎^{◇1}

ソリューションユニット スペースデザインファクトリー

スペースソリューション部長 大高 良和^{◇2}

政府による2050カーボンニュートラル宣言を契機に、展示会業界においては、サステナビリティ（持続可能性）に配慮したイベント実施へ向け、検討が加速している。

一般社団法人 日本電機工業会（JEMA）展博委員会が参加している展示会関連団体連絡会^{*1}の定例会合（2023年6月23日開催）において、標記ガイドラインに関する特別報告会が開催されたので、その概要を紹介する。

このガイドラインは、一般社団法人 日本イベント産業振興協会の正会員で理事を務める株式会社 電通ライブが制作し、イベント業界全体の発展を目的に無償公開しているものである。

なお、本稿は、事務局が書き起こした報告内容を基にスピーカーが加筆し、ご寄稿いただいた。

^{*1} 経済産業省、独立行政法人 日本貿易振興機構（ジェトロ）、一般社団法人 日本展示会協会、一般社団法人 日本イベント産業振興協会（JACE）、JEMA 展博委員会の5機関にて構成

1. はじめに

当社は、電通グループのイベント・スペース專業会社である。JACEの理事会社という立場も踏まえ、当ガイドラインを業界に先んじて策定させていただいた。2年前、業界の皆さまに一定の評価をいただいた「コロナ禍におけるイベントガイドライン」と比べると、当ガイドラインはまだベータ版の位置付けである。ただ、近い将来、イベントのサステナビリティ化が社会から強く求められる状態が訪れることを見越し、広い意味でイベント作りに携わる多くの皆さまにご活用いただければと考え、公開させていただいた。

2. 背景と目的

世界中のさまざまな分野で、サステナビリティに対する関心が高まり、社会全体がその進化に対する取組みを加速させている。今やサステナビリティに取り組むことは「プラス」になるのではなく「当たり前」の時代であるともいえる。積極的に取り組まなければ、ブランドイメージを毀損（きそん）し、取引先として選ばれなくなる、といったビジネスとしてのリスクを抱える恐れさえある。また、サステナビリティに取り組んでいても、実態に即していなければペナルティを受ける事案も報告されている。

このような潮流の中、対応の遅れていたイベント業界においても、サステナビリティへの配慮が求められるケースが増えてきた。

当ガイドラインでは、従来のイベントを変革し、サステナビリティに配慮したイベントを実現していくために、

◇1 一般社団法人 日本イベント産業振興協会 理事

◇2 1級建築施工管理技士

イベントの作り手（主催者・出展者・協賛社・企画者・制作者）を対象に、サステナビリティに配慮したイベントの作り方やチェックリストを掲載している。

3. サステナビリティとイベント

3.1 イベント視点で考えるサステナビリティとは？

サステナブルとは「持続する (sustain)」と「できる (able)」を組み合わせた言葉であり、「持続可能な」という意味がある。

2015 年 9 月に、国連にて「2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標である“Sustainable Development Goals (SDGs = 持続可能な開発目標)”」が採択されたことにより、全世界でサステナビリティへの関心が高まり、取組みが急加速している。

その取組みは、自らの関心事だけでなく、トリプルボトムラインの観点から、環境・社会・経済の 3 側面を総合的に高めていくことが求められている（図 1）。

わが国でも、政府が 2050 年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにするカーボンニュートラルを目指す宣言を発出している。サステナブルな社会の実現には、あらゆる人が協力、連携しなければ成し遂げられない。小さなことからでも、「全ての人が自分事化して取り組む」ことが重要である。

3.2 サステナビリティに取り組む上での留意点

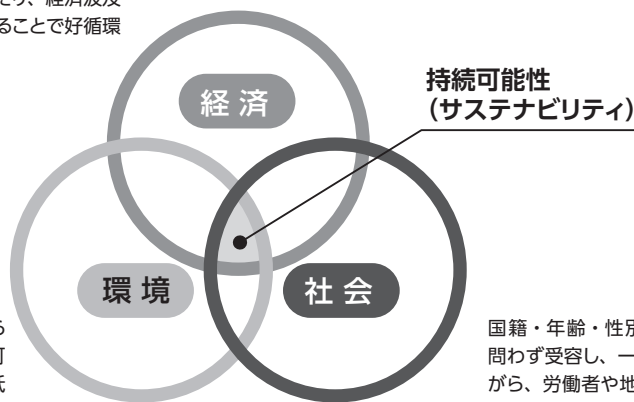
実態が伴っていないのに、取り組んでいるかのように見せかける「グリーンウォッシュ」「SDGs ウォッシュ」、そして人権への不十分な配慮は、コミュニケーション領域の問題にとどまらない。生活者からの信頼を損ない、ESG 投融資先としての企業の魅力を著しく毀損する可能性があり、近年、特に注意が求められている（図 2）。

以下に、「ウォッシュ」を回避するためのポイントを列記する。

- ① 根拠がない、情報源が不確かな表現を避ける
- ② 事実よりも誇張した表現を避ける
- ③ 言葉の意味が規定しにくい、あいまいな表現を避ける
- ④ 事実と関係性の低いビジュアルを用いない
- ⑤ 製品、サービスの全体像との整合性を確認する
- ⑥ 条件付きの場合は明確に示す
- ⑦ 耐久性や廃棄についての情報（マテリアルサイクル・サーマルサイクル・焼却／埋め立てなど）に関するラベルを正しくつける
- ⑧ 正しい選択をするために必要な情報を隠さない
- ⑨ 載せきれない情報にも簡単にアクセスできるように配慮する

組織や企業の安定を目的として経済的収益を高めるだけでなく、地域社会に対して収益を還元したり、経済波及効果をもたらせるなど、経済的影響を与えることで好循環を創出することが期待されています。

脱炭素社会の実現に向けて、廃棄物を減らしたり、エネルギー利用を抑えたり、再生可能エネルギーを使用するなど、環境負荷低減に努めることが重要です。



国籍・年齢・性別・障がいの有無などを問わず受容し、一人一人の人権を尊重しながら、労働者や地域に対してプラスの影響をもたらすことが重要です。

出所：Our Common Future (United Nations, 1987) および
日本産業規格 JIS Q 14001 : 2015 (ISO14001 : 2015) を基に作成

図1 イベント視点で捉えたトリプルボトムラインと持続可能性の関係

3. 3 とにかく一步踏み出すことが重要

イベントは、来場者に熱量の高い体験価値を提供できる重要なコンタクトポイントである。コロナ禍を経た今だからこそ、その価値が見直されている。それをサステナブルに進化させることで、さらなる共感醸成が期待できるようになる。

ただ、イベント制作者の中には、サステナビリティに配慮したイベントは難易度が高い、と尻込みしてしまうケースが多く見受けられる。しかし、初めから全てを完璧にしようと構える必要はない。

例えば、イベント会場選定では、

「参加者の属性上、移動による環境負荷が少ない場所か？」

「再生可能エネルギーを活用できる設備があるか？」

「イベント会場内は、つえや車いすでも簡単に移動できるか？」
などなど

一部分からでも結構。どうすればサステナブルになるかを考え、とにかく一步前に踏み出す勇気が重要である。

3. 4 作り手側のコミュニケーションツールとして活用

イベントを制作する上で、主催者・出展者・協賛社・企画者・制作者・会場・来場者・地域など、多くの関係者が関わっている。そうした中で実施する「サステナビリティに配慮したイベント」の答えは一つではない。

当ガイドラインは、イベントの作り手それぞれがサステナビリティについてまず考え、その上で各自の意識合わせをするためのコミュニケーションツールとしてご活用いただくことが狙いである。

「カーボンネガティブ」とは、CO₂ 排出量より吸収量のほうが多いという状態。具体的にはどういうことなのかははっきりしません。この水を飲むと CO₂ を吸収することに貢献できる、との誤解を招きそうです。



取水地である森が CO₂ を吸収していることを根拠に「カーボンネガティブ」を訴求するのは、拡大解釈であり、誤解を招きます。

出所：電通「サステナビリティ・コミュニケーションガイド」を参考に作成
https://www.dentsu.co.jp/sustainability/sdgs_action/pdf/sustainability_communication_guide.pdf

図 2 ウォッシュが懸念される例

4. サステナビリティに配慮したイベントとは？

4. 1 取り組むべきテーマや領域は一つではない

従来型のイベントは、スクラップ＆ビルドを基本とし、多くのヒトとモノが移動する。故に「サステナビリティに配慮したイベント」というと、まず初めに取り組まなくてはならないのが、CO₂ 排出量の削減である。

イベント制作の過程や本番での CO₂ 排出量を削減し、環境への負荷を減らす。ただ、それだけではなく、イベントに関わる人への DEI^{*2} 配慮や、感染症対策を含めた安全衛生を徹底するなど、多角的な視点で対応を進めなくてはならない。

当ガイドラインは、さまざまなテーマや領域ごとに、サステナビリティに配慮すべきポイントについてまとめている（図 3）。

* 2 ダイバーシティ（多様性）、エクイティ（公平性）、インクルージョン（包括性）の頭文字からなる略称

4. 2 世界の潮流・事例

世界に目を向けると、ヨーロッパを中心に既に多くの事例が生まれている。

例えば、サステナビリティ先進国オランダにおける音楽イベントでは、出演アーティスト、会場や来場者、政府や自治体が一体となって対応するだけでなく、来場者も関心をもってその施策を評価する時代を迎えている。

以下に、音楽イベントでの取り組み例を列記する。

〈エネルギー視点〉

- ライブ会場にソーラーパネルを設置する
- エネルギー効率の高い機器／照明／電力を使用する
- 機材配送はクリーンな燃料を利用する
- ライブ中の観客の動きでエネルギーを生成できるように、会場に発電効果のあるキネティック（動力）フロアを設置する
- 航空機の利用を最小限に抑える
- 来場者に CO₂ 排出量が少ない輸送手段を推奨する呼びかけを行う
- CO₂ 削減に寄与する移動手段での来場をアプリで証明した来場者に、割引サービスを適用する
- チケットが 1 枚売れると 1 本植樹するような施策を行う

〈調達視点〉

- 全ての会場で石油由来のプラスチック製品の提供を中止する
- 来場者のための水分補給ステーション設置する
- 地元の食料調達を検討する

〈廃棄物視点〉

- ステージを再利用可能なマテリアルで組み立てる
- 食品廃棄物の堆肥化、余剰食料の寄付を行うなど



図 3 サステナビリティに配慮したイベントを作るために取り組むべき領域（例）

4. 3 サステナビリティに配慮したイベントの企画・制作フロー

イベントを一過性のものとして捉えてはいけない。イベントの作り手それぞれが、サステナビリティについて考え、アクションを繰り返し、継続的改善を図ることが重要である。さらには、イベントに参加されるお客さままでもが、日常の行動を変えていくきっかけを提供できるようになることが望ましい状態だと思う（図4）。

Step1 社内の情報を整理する

イベント主催者・出展者・協賛社・企画者・制作者は、サステナビリティに関する方針や、実施／検討されているサステナビリティ活動について、社内ヒアリングを行う。

そして、ヒアリングした内容をまとめ、サステナビリティの領域ごとに整理し、体制構築時にチームへ共有する。

Step2 適切なパートナーを決定し、体制を構築する

イベント主催者・出展者・協賛社・企画者・制作者は、計画しているイベントにおいて適切なパートナーを検討し、決定する。

その際、サステナビリティに配慮したイベントの計画・評価・改善などを促す役割を担う、サステナビリティ推進担当者を選任する。

各社のサステナビリティ推進担当者は、協力しながら、イベントの企画・制作におけるサステナビリティの実現に向けた取組みに関する事項を決定し、その内容や詳細を社内の関係者にも周知、連携していく。

また必要に応じて、外部有識者にご協力を依頼し、サステナビリティ推進担当者と連携して進めることも検討する。

Step3 チェックリストを活用し、企画・制作を行う

当ガイドラインに掲載しているチェックリストを活用し、「企画・設計デザイン」「施工」「運営」のイベント制作段階別に実施を目指す項目をチェックして、項目に沿った具体的な取組みを検討し、イベントを作っていく。

Step4 イベント実施後に評価・分析する

イベント実施後、改めてチェックリストを確認し、実施したイベントに対する評価を行う。実施した内容や実施できなかった内容などを振り返り、チェックリストに記載。次回イベントの企画・制作時に活用することで、サステナビリティに配慮したイベントの知見を蓄積しながら、イベントの継続的改善を図っていく。

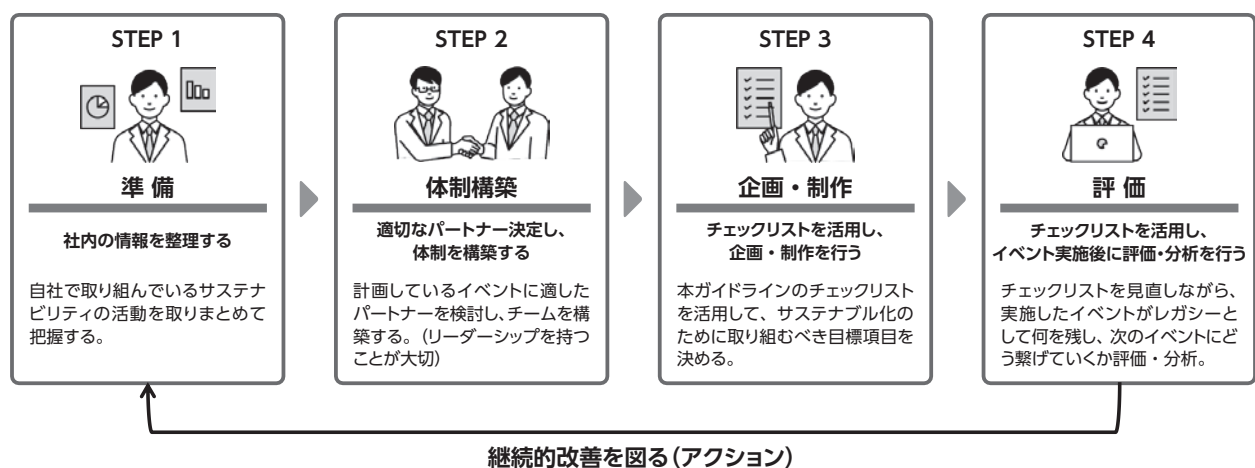


図4 サステナビリティに配慮したイベントの企画・制作フロー

5. イベントにおける環境負荷

5. 1 イベントの環境負荷は想像以上に大きい

イベントの多くは終了時に大量の廃棄物を生み出してしまっただけでなく、制作の過程で多くのCO₂も排出してしまう（図5）。加えて、参加者や関係者の移動や宿泊、資機材の調達や輸送、エネルギー消費なども含めると、われわれが自覚している以上に大きな環境負荷を与えてしまっている。

こうした環境負荷を低減していくため、イベントのサプライチェーン全体を通して確認すべきポイントを、チェックリスト（環境編）にまとめた。

5. 2 配慮すべき領域や取組み例

(1) 組織内の管理／教育体制

外部有識者を含め、組織やチームが一体となり、目的共有や知識向上に努める

- 各社／各担当が連携し、目標を共有できる体制を構築する
- 従業員／スタッフ／関係者に対して、サステナビリティに関する研修や情報共有を実施する
- ISO20121 や ISO14001 など、マネジメントシステム（国際標準規格）の導入を検討する

(2) 廃棄物削減

廃棄物量を把握し、その削減方法を検討・実行する

- 環境配慮や廃棄物削減に取り組んでいる会場を選定する
- 来場者配布物、チケット等、制作物のデジタル代替を行う
- 簡易梱包を採用することで、梱包材の廃棄物を低減する

(3) エネルギー（制作、会場、輸送／移動）

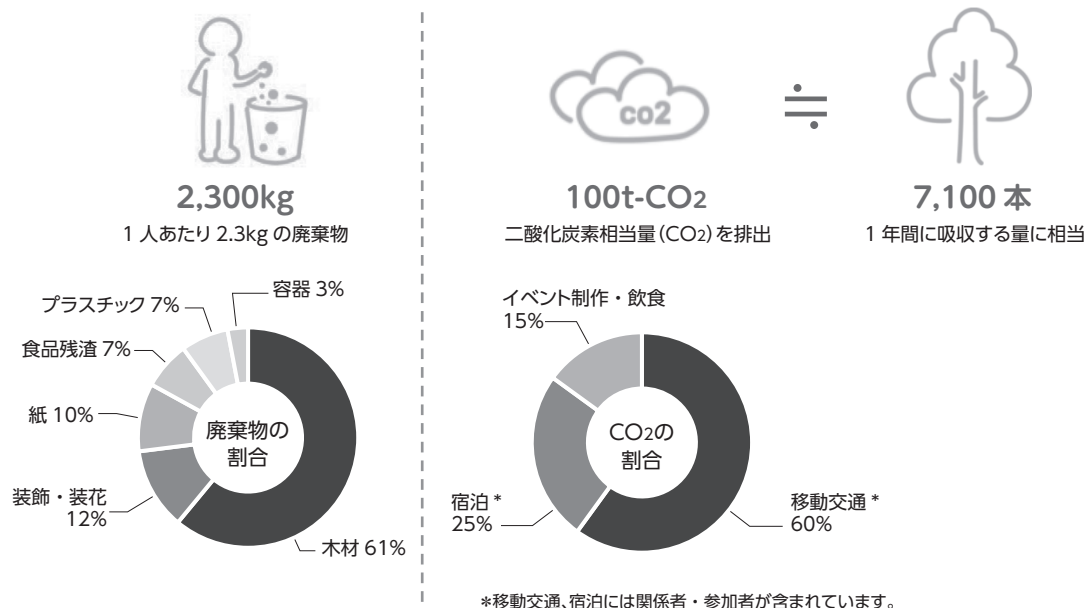
エネルギー使用量を把握し、CO₂ 排出量の低減方法を検討・実行する

- グリーン電力（太陽光発電・風力発電等の再生可能エネルギー）を使用した電源を供給する
- CO₂ 排出量の少ない輸送／移動手段の選択や移動経路を設定する
- 環境に配慮した会場選定を行う

(4) 調達

サステナビリティに配慮されたマテリアルやサービスを調達、利用する

- システム材／リース品／保管品／リサイクル品／アップサイクル品を活用した設計とする



出所：サステナブルイベントネットワークの提供情報を基に作成
<https://sustainable-event-network.com/>

図5 1000名規模のイベント1回当たりの環境負荷（算出条件：都内開催1泊2日 全国からの移動や宿泊、飲食を伴う懇親イベント）

- 制作物のマテリアルとして、リサイクル可能な材料、商品を導入する
- 環境ラベル等のサステナビリティに関する認証を取得しているマテリアル、機材を導入する

(5) 水利用

水使用量を把握し、節水に努めるとともに、飲料水に起因する廃棄物を低減する

- 節水または水循環型の機器導入や、雨水をトイレに利用する
- ペットボトルや紙コップの使用削減のため、給水スポットを設置する
- マイボトル持参や、ペットボトルの持ち込み制限など、参加者にアクションを促す

(6) 地域社会連携

ハード・ソフトとも地産地消を心がけ、環境配慮+αで地域に貢献する

- 資機材だけでなくケータリングや弁当調達において地産地消を心がけ、輸送距離を短縮する
- 地域の伝統工芸や技術を取り入れることで人の移動を抑え、同時に地域活性化を図る

- 地域資源であるユニークベニュー*³をイベント会場として採用する

*³ 歴史的建造物、文化施設や公的空間等で、会議・レセプションを開催することで特別感や地域特性を演出できる会場

5. 3 環境配慮型のイベントを作るためのチェックリスト

環境編のサステナビリティに配慮したイベントチェックリストは、以下のリンクよりご利用いただくことができます(図6)。

<https://www.dentsulive.co.jp/ss/2022/12/SustainableEventChecklist.xlsx>

6. おわりに

紙幅の都合上、本稿では6月23日に開催された特別報告内容の一部を紹介した。上述の他、当ガイドラインには、「チェックリスト活用フロー」「用語の解説」等も記載している。

以下ウェブサイトに掲載しているので、必要に応じご参照いただければ幸いです。

<https://www.dentsulive.co.jp/ss/2022/12/SustainableEventGuideline.pdf>



■サステナビリティに配慮したイベントチェックリスト【環境編】Ver. 1.0

【利用方法】

① イベント企画開始時に、以下凡例も参照しながら、実施を目指すチェック項目の「目標」欄にチェックを付ける。

：実施の難易度が低く、イベント主催者と企画者/制作者が努力し続けることで達成できる項目

：実施の難易度が高く、イベント主催者と企画者/制作者だけでなく他社や専門業者の協力も得て達成できる項目

② ①でチェックした項目を目標とし、「実施する具体的な取り組み」欄に実施予定の内容を記載、制作フェーズへ進む。

③ イベント終了時に、達成できたチェック項目については、「達成」欄にチェックを入れ、実施できなかったことやできなかったこと、次回に向けた改善点等を「次回実施に向けた改善点、引き継ぎたい点」欄に記入する。

④ 次回のイベント実施時には、チェック欄と「実施する具体的な取り組み」・「次回実施に向けた改善点、引き継ぎたい点」を基にあらたに実施を目指すチェック項目の見直しを行う。

フェーズ	対象領域								効果	責任者	チェック欄		チェック
	組織内 管理・教育	廃棄物 削減	エネルギー			調達	水利用	地域社会 連携			目標	達成	
		●	●		●				★★				会議は極力リモート化することで、移動や会議資料等に
		●	●						★★				会議に用いる資料はデジタル化（ペーパーレス化）し、廃棄
	●								★★★				各社・各担当が連携し、目標を共有できる体制を構築する
				●					★				イベント実施の適切な実施時期、期間を選定 ex)冷暖房設備の過度な使用を避ける、必要最低限の期間と
		●		●	●				★★★				環境に配慮した会場選定を行う ex)公共交通機関でアクセスできる会場を選定しCO2排出量
		●	●			●			★★				来場者数の把握、歩留の設定を適正化することで、ノベル

図6 イベントチェックリスト（一部）